

書評

松本雅彦 著

日本の精神医学 この五〇年

高柳 功

本書は畏友松本雅彦先生の遺著である。著者と評者は同年生まれ、精神病理学と精神科医療の歴史という面ではほぼ同時代を生きてきた。一時期「臨床精神病理」誌の編集と一緒に携わったが、松本先生の学風は衒がなく中庸、かつ誠実であった。成書の読み込みも深く、さすが京都学派といつも感じていた人である。

本書は全七章から成っている。第一章から第五章までは、精神科医としての自己形成が自伝的に描かれている。インターン制度への問題意識、精神医学を選ぶに至った動機など誠実な語り口で述べられている。自らを「斜に構える」生き方への嗜好があるという性格は、案外精神病理学者に通底する傾向ではないか、と評者も同感する。入局後の無給医の暮らしと大学での研修というか、丁稚奉公のありさまは名門の京都大学も、信大のような田舎の大学も全く同じであった。

やがて精神科医としての経験も全く不十分なまま、市中病院に赴任させられる。第二章はこの時代の精神科病院のありさまが活写されている。300名超の入院者に常勤医2人という状況の中からも、自らの進むべき方向性、特に精神病理学への関心が深まっていく様子が語られる。

第三章、第四章では劣悪な治療環境の中にあってもユニークな患者さんとの出会いや、個性豊かな先輩医師との出会いと交流が語られ、効率優先の現代の精神科医療では考えられないその時代の精神科病院のゆったりとしたありさまが描かれている。そして著者の専門領域は精

神病理学に固まっていくのである。

第五章「精神医療改革運動」では60年代の精神科病院に多くみられた過剰収容と監禁・暴力といった問題を、反精神医学を掲げどこに批判する一連の精神医療改革運動が、当事者の一人として述べられている。改革派の象徴となった金沢学会で著者がどのような役割を担ったか詳らかではないのだが、こうした運動へかわる一方で学問への乾きが強くなっていく。当時の若手精神科医の心の揺れ、心の軌跡が評者にも共感できる。

第六章、第七章は日本の精神医学、精神科医療への批判と警告が主になっており、おそらく死を予期した著者が本書で最も訴えたいことであつたに違いない。それはDSM-Ⅲの流入とそれによってもたらされた臨床の場の荒廃である。「精神科の臨床は、表面的、断面的、羅列的に症状を拾い上げ、それら症状に対するクスリを投与するだけに明け暮れるようになってしまった」。症状中心主義と症状ごとにクスリで治めるという製薬資本の戦略は見事にマッチする。もはや臨床の場の荒廃といってよい。これはわれわれ世代の精神科医に広く共有されている危機感である。

本書は松本雅彦先生の精神医学界への遺言状でもある。DSM世代の、特に生物学的精神医学分野の精神科医には是非一読して欲しい。

(有沢橋病院院長)

●四六判 232頁 2015年9月 定価：本体
2,800円＋税 みすず書房刊